

〈研究ノート〉

日本の大衆メディアにおける日系人の表象

佃 陽 子

日本において日系人はどのように表象されてきたのか。本稿が着目するのは、特に戦後から現代にかけての、日本の大衆メディアにおける日系人、ことに日系アメリカ人の表象である。明治のはじめから1970年代まで日本が移民送出国であったという過去の忘却が指摘されて久しいが、日系アメリカ人の歴史、特に第二次世界大戦中の強制退去・強制収容の経験は、小説やテレビドラマ、映画などの大衆メディアを通して日本で一般に広く「再発見」された。日本人のアメリカへの官約移民が開始されて100周年にあたる1980年代には、「日系人ブーム」と呼ばれた現象が起こった。この「ブーム」の代表的なものとして、山崎豊子のベストセラー小説『二つの祖国』（1983）および、これを原作とするNHK大河ドラマ『山河燃ゆ』（1984）がある。史実をもとにしたこのフィクションは、真珠湾攻撃から東京裁判まで日米間の戦争に翻弄された日系アメリカ人二世の主人公がアメリカで被った激しい人種差別の苦難と、日米の「二つの祖国」に対する愛国心のジレンマをドラマティックに描いた。この「日系人ブーム」以降も日本では、日系人を主題とした大衆メディアが戦争に関する以外のものも含めて多数製作されている。ハワイ出身の日系四世を主人公としたNHK連続テレビ小説『さくら』（2002）、日系ブラジル移民の歴史を描いたNHKドラマ『ハルとナツ 届かなかった手紙』（2005）、実在した日系カナダ人野球チームを取り上げた映画『バンクーバーの朝日』（2014）とその漫画など、日系アメリカ人に限らず、日系ブラジル人、日系カナダ人など様々な地域における日系人が取り上げられるようになり、現在日本の大衆メディアにおいて「日系人」というテーマはそれほど珍しいものではなくなっている

といえる。

日本の大衆メディアにおける日系人の表象は、その歴史の叙述も含めて、日本人の日系人に対するイメージの形成や理解に大きな影響を与えてきたと思われる。例えば、現在の日本人の中年世代以上の多くは、日系文学史において最も重要な作品の一つといえるジョン・オカダの『ノー・ノー・ボーイ』(1979 [1957, 1976]) は知らなくても、『二つの祖国』あるいは『山河燃ゆ』は知っているのではないだろうか。私はこれまで戦後アメリカへ移民・移住した日本人にインタビューを重ねてきたが、「移民」に対するイメージやアイデンティティに関する対話のなかで、『二つの祖国』が引き合いに出されたのは一度や二度ではない。そこで描かれた日系アメリカ人像をほぼ正しいと認識するにせよ、誤っていると指摘するにせよ、日本の大衆メディアでの表象が日系人に対する理解の指標としてしばしば提示されるのである。

日系移民研究者たちはこうした大衆メディアで描かれる日系人の表象の誤りをしばしば指摘し、時には反発の声を上げてきた。山中速人は、80年代の日系人ブームの「日系人」ドラマについて、「日本人の多くは、ハワイ日系人といえば、「日本を心ならずも離れ、遠い異国の地で望郷の念にさいなまれて暮らす不運な人々」という固定観念にとらわれている」と批判する。つまり、日本に住む日本人は、日系人をノスタルジー演出のために利用している¹。日本の大衆メディアの多くが、日系人は「大和魂」、「日本らしさ」、「我慢」、「勤勉」などの日本文化に特有の性質を備えており、日系人が異国の地で苦難を乗り越えて成功できたのは日本人という「血」の優秀性によるものである、といったナショナリズムやエスノセントリズムを強調してきた²。著者や製作者が意図せざる形で、「日系人」の表象が大衆メディアの市場性に取り込まれてしまうこともある。日系アメリカ人の強制収容とそれに対する補償の実現といった事実すら、日本の右派・左派メディアは、それぞれの政治的主張の正当化に利用してきた³。日系移民についての学習は多文化教育の一環として日本の教育機関で取り入れられつつあるが、こうした大衆メ

ディアを通じて「日系人」を知った日本の学生たちに対して、どのように日系移民について教えるべきなのだろうか⁴。

日本における日系人の表象は、その時代の日本人が日本人としての自己をどのようにイメージしていたかを示すものでもある。矢口祐人は1956年に岩波書店から出版された写真集シリーズの一つ『日系アメリカ人：ハワイの』を分析し、写真集におけるハワイの日系アメリカ人の表象は、当時の日本人にとって自己イメージを創造／想像する「レンズ」の役割を果たしていたと述べる。物質的に豊かなアメリカ社会に同化し、経済的・社会的に成功したハワイ日系人の姿を見た当時の日本人は、アメリカの政治的・軍事的・経済的庇護のもとで躍進する将来の理想的な自己イメージを重ね合わせた。真珠湾攻撃後の1942年に出版された、ハワイの日系二世による著作『私の生れたハワイ』が、ハワイにおける白人支配と人種差別を厳しく批判し、日本が戦争でアメリカを破り、ハワイを支配下に置くことがハワイにとっていかに望ましいことか訴えたのはまるで逆である⁵。変化する国際関係の中、日本において日系人は都合のよい表象として利用されてきた。

テッサ・モーリス＝スズキが『過去は死なない』で論じるように、過去に対する理解は歴史教科書や研究書からのみで形成されるわけではなく、歴史小説、映画、記念碑、博物館など様々な大衆メディアに大きな影響を受けており、常に変化している。モーリス＝スズキは、日本の歴史教科書のアジア太平洋戦争についての記述をめぐる「歴史教科書論争」における問題点を指摘する中で、国によって過去の見解が対立することや、時代とともに過去の記憶のされ方が変化することを理解するためには、「教科書のむこうを眺めやり、過去のイメージが大衆文化によってどのような枠で切り取られているかを見るのが決定的に重要ではないか」と述べる⁶。その上で、モーリス＝スズキは小説、写真、映画、インターネットといった大衆メディアで描かれる多様な「大衆的な歴史表現」を分析し、歴史的事実の存在や「真実」の追求よりも、むしろ「歴史への真摯さ」、つまり、いかにして歴史に真摯に向き合うかという問

題の重要性を論じている。

本稿はモーリス・スズキのアプローチにならない、「教科書のむこう」、つまり日本の大衆メディアによる「日系人」作品に着目する。日本における「日系人」大衆メディアはどのように変遷し、日本における日系人の理解にどのような影響をおよぼしてきたのか。そうしたメディアにおける日系人の表象は、「日本人」の過去の記憶や、自己イメージをどのようにあらわしているのか。本稿では1980年代の日本で起きた「日系人ブーム」を中心に、日系人をテーマとする日本の大衆メディア作品をまとめる。ただし、個々の作品を深く分析することはせず、ここではできるだけ「日系人」大衆メディアをリスト化することに努めたい。いまだ資料収集・分析の途上にあるため、現在把握できているもののみを紹介する。

ここで、本稿における「日系人」大衆メディアを、日系アメリカ文学と区別しておきたい。アメリカでは、公民権運動のなかで生まれたアジア系アメリカ研究のもと、英語で書かれた作品を中心に「日系アメリカ文学」研究が始まった。日本でも1970年代後半に日系アメリカ文学の研究が始まり、英語による文学の翻訳が出版されたほか、移民世代による日本語で書かれた文学なども研究の対象とされてきた⁷。何を「日系アメリカ文学」の範疇とするのかについては日系文学研究者の中でも意見のわかれるところであるが、「日系文学」はあくまで移民・移住をした者、あるいはその子孫によって著された作品を研究対象としている⁸。また、ハリウッド映画など、アメリカの大衆文化における日本人・日系人の表象についての研究にも蓄積がある⁹。

本稿が取り上げるのは、主に日本人の作り手が、日本にいる日本人を主な読者や観衆として想定して製作した、「日系人」を主題とした大衆メディアである¹⁰。製作者が日本国外に居住する「移民」あるいは「日系人」であるかどうかに加えて、「日本人」であるかどうかここではあまり重要ではない。とはいえ、日本人をオーディエンスとした日本語の作品であることから、作り手はむしろ非日系人の「日本人」である作

品が多くなる。また、ここにおける「大衆メディア」には、フィクション・ノンフィクションを含めた小説、ドキュメンタリー、演劇、漫画、映画やテレビドラマなどの映像作品を含むが、それらは単純に媒体別に分類できるものではない。モーリス・スズキが述べるように、それぞれのメディアは関連しあっており、例えば、小説を原作に映画やテレビドラマが作られたり、漫画化されたり、関連したドキュメンタリーが作られたり、ウェブサイトが開設されたりするなど、大衆メディアは時代とともに多様化しているし、違う媒体になることによって内容も変化する。

本研究が対象としているのは、日系人ではなく日本人、また、アメリカ社会でも日系アメリカ社会でもなく日本社会である。こういった意味では「移民（に関する）研究」ではないのかもしれない。しかし、研究者として、教育者として、いかに「日系人」を日本で教えることができるのかを探る一つのアプローチとして、日本社会が「日系人」にどのようなまなざしを向けてきたのかを理解することも重要ではないだろうか。文学研究者でもメディア研究者でもない私がこのような問題に挑むこと自体相当無謀であることは重々承知の上なので、おおいにご批判いただきたい。

「日系人ブーム」以前

1980年代の「ブーム」以前に、日系人に関する作品がなかったわけではない。日本に住む日本人が日系人について知らなかったわけでも当然ない。日系人を家族や親戚に持つ者は多数いるし、占領期に日本に駐留した米兵の中には日系二世も含まれていて、彼らと結婚して「戦争花嫁」と呼ばれた日本人女性も多数いた。しかし、日系アメリカ人の歴史、特にその第二次大戦中の経験については、数十年の空白期間を経て、今まで知られていなかった歴史として日本社会に知られることになった。宮崎正弘は、1967年に『週刊読売』に連載された藤島泰輔の小説『忠誠登録』が、戦後日本で最初に日系アメリカ人の強制収容の歴史を伝え、社会問題化したものだとしている¹¹。日系二世を主人公にしたこの小説は

フィクションではあるが、実際に当時ロサンゼルス日系コミュニティで写真店を経営していた宮武東洋一家をモデルとしている。大統領や米軍高官の当時の発言や実際の新聞記事なども取り入れ、真珠湾攻撃から強制収容中までの日系コミュニティや家族の苦難を描いている。藤島は1966年にロサンゼルスを訪れた際に、宮武東洋から日系人強制収容における「忠誠登録」について聞き、「これほどの材料が、戦後二十年眠っていたということがどうしても信じられ」ず、「何か、そこだけが真空状態に置かれていたような不気味な感じすら」持った、と自分の受けた衝撃の大きさを語っている¹²。この小説は、1978年に小学生高学年向けのジュニア版に書き換えられて出版された。

井上靖は戦前渡米した日本人移民を描いた小説『わだつみ』を、1966年1月から1975年12月にかけて断続的に雑誌『世界』に連載したが、未完のまま執筆を中断した¹³。物語は1920年の日本人移民社会の様子で終了しているため、戦争体験については触れられていない。また、映画監督で脚本家の新藤兼人は、日本からの移民が停止された1924年直前に結婚を機にアメリカへ移住した実の姉の聞き取りを交えて、戦前から強制収容、戦後の再定住から現在までの姉一家のアメリカでのあゆみを『祭りの声：あるアメリカ移民の足跡』（1977）でドキュメントした。また、山田太一脚本のテレビドラマ『あめりか物語』が1979年10月にNHKで4回に渡って放送された。

1980年代の「日系人ブーム」

1980年代の「日系人ブーム」の最たるものは、前述した山崎豊子の小説『二つの祖国』（1983）とこれを原作とするNHK大河ドラマ『山河燃ゆ』（1984）である。『二つの祖国』は『週刊新潮』に1980年から約3年に渡って連載され、1983年に単行本全3巻が出版された。文芸評論家の権田萬治は、1986年の文庫版の解説で、日本でほとんど知られていなかった、戦中の日系アメリカ人の強制収容という歴史を日本に広く衝撃的に知らしめる契機となったのが『二つの祖国』であると述べて

いる¹⁴。『二つの祖国』は、シベリア抑留を描いた『不毛地帯』（1976～1978）、日本人中国残留孤児をテーマにした『大地の子』（1991）と合わせて、山崎豊子の著作のなかでは「戦争三部作」と呼ばれている¹⁵。

『二つの祖国』連載終了から1年を待たずに、これを原作としたNHK大河ドラマ『山河燃ゆ』が1984年1月から同年12月まで全51回放送された。大河ドラマといえば、戦国時代や幕末期などのいわゆる時代劇が定番だが、『山河燃ゆ』は続く『春の波濤』（1985）、『いのち』（1986）と合わせて、明治以降の時代を描いた「近現代三部作」の第一作目である。『山河燃ゆ』の平均視聴率は関東地区で21.1パーセントで、前作の大河ドラマ『徳川家康』（1983）の31.2パーセントと比較すると、現代ドラマになって視聴率は大きく落ち込んだ¹⁶。それでもNHK大河ドラマという高視聴率のシリーズで日系アメリカ人が取り上げられたことによって、『山河燃ゆ』が多くの日本人に日系アメリカ人の戦争体験を知らしめる機会になったであろうことは想像に難くない。

『二つの祖国』および『山河燃ゆ』は、日系アメリカ人社会を巻き込む論争を巻き起こした。この問題についての議論は別の機会に改めたいが、ここで論争の概略を述べることにする。当時日系アメリカ人コミュニティは、戦時の日系人強制収容の補償運動の真ただ中であつた。そのような状況下で、日系二世の主人公が日米開戦によって日本とアメリカ「二つの祖国」に対する愛国心に苦悩するという『二つの祖国』の物語は、実際に日系人が日本に対しても忠誠心を持っていたかのように思わせかねないものであり、日系アメリカ人コミュニティからの大きな反発を引き起こした。アメリカでは、アジア系のテレビチャンネルで、NHK大河ドラマが日本での放送よりやや遅れて放送されてきたが、『山河燃ゆ』は日系人コミュニティの反対を受けてアメリカでの放送が中止された。ジャーナリストの宮崎正弘はこの問題を『二つの山河 日系アメリカ人かく闘えり』（1984）で取り上げ、日系コミュニティの指導者などへのインタビューや、強制収容に関する資料を含めてまとめている。日系移民史を専門とする研究者なども、この問題に対する意見を雑誌な

どに寄稿し、中には鋭く批判した。雑誌『文化評論』の特集「『日系米人』論への視点」で、日系アメリカ研究者の飯野正子と篠田左多江は、日系人ブームにおける大衆小説やマスコミ報道で描かれる日系アメリカ人像は偏ったものであると批判し、日系アメリカ人の歴史の正しい理解が必要であると訴えた。同じ特集で、社会学者の河村望は『二つの祖国』にみられる日本の「超国家主義」、「右翼的ナショナリズム」を厳しく批判している¹⁷。また、『正論』の「特集・日系人」では、歴史学者の本間長世による寄稿に加え、篠田左多江が日系アメリカ文学を紹介した¹⁸。

日系アメリカ人らも、日本の雑誌に『二つの祖国』に対する意見を寄せた。元米国国会図書館日本課長アンドルー・クロダは、日系アメリカ人は日本人ではなくアメリカ人であると鋭く批判している¹⁹。また、『文藝春秋』は、「日系米人として思うこと」(What do Japanese Americans really think?)という題目で、日系アメリカ人に対してエッセイの投稿を日英両方の言語で募集し、108篇の応募の中から15篇のエッセイが1984年6月号の特別企画で掲載された。執筆者は二世、三世、四世、新一世、新二世など様々で、中には当時サンフランシスコ州立大学で日系アメリカ研究を教えていたジェームズ・オクツや、当時カリフォルニア大学バークレー校の大学院生だったラリー・シナガワが含まれている²⁰。こうした一連の議論自体が山崎の小説やドラマのパブリシティに果たした効果も大きいであろう。

『二つの祖国』や『山河燃ゆ』以外にも、80年代は多くの「日系人」大衆メディアが発表された。日本テレビで放送されたテレビドラマ『波の盆』(1983)は、観光旅行でハワイを訪れた日本人女性と日系一世の老人の交流をノスタルジックに描いた²¹。1984年にフジテレビの「ナショナル木曜劇場」で連続ドラマとして放送された『オレゴンから愛』は、オレゴン州に住む親戚の日系二世夫婦に引きとられた日本人の少年の成長がテーマの現代劇である。このドラマは1996年まで断続的に続編が放送された。また、新藤兼人の『祭りの声』を原作にした映画『地平線』が1984年に公開された。明治期に渡米した福岡出身の移民一家

の現代までの歴史を描いた長谷川法世の漫画『がんがらがん』は、1980年から3年間『ビッグコミックオリジナル』に連載された。

日系人の強制収容は、80年代のブームが過ぎた後も日本の様々な大衆メディアで取り上げられている。井上ひさし脚本の演劇『マンザナ、わが町』はこまつ座が1993年7月に初演し、2015年に同劇団が再演した²²。90年代にはハリウッドも日系人の強制収容に関する映画を制作するようになり、アラン・パーカー監督作品の『愛と悲しみの旅路』（1990）や、日本人女優の工藤夕貴が主演した『ヒマラヤ杉に降る雪』（1999）が日本でも公開された。ノスタルジーとしての日系人の表象は、2009年の日本映画『ホノカアボーイ』に見られるように、現在でも健在である。有名アパレルメーカー創業者のハワイ島での経験をつづった小説をもとに製作されたこの映画は、日本のドラマや日本食を好む日系二世の老婦人をはじめ多くの日系人との交流を、ハワイの田舎町を舞台に描いた。

日系アメリカ人兵士のヒロイズムと「ヤマトダマシイ」

戦中アメリカで「敵性外国人」としてあからさまな人種差別を受けつつも、アメリカのために戦った日系アメリカ人二世兵士については、そのヒロイズムから、日本の大衆メディアに頻繁に取り上げられてきた。しかし、戦争直後の1951年に日本で上映されたアメリカ映画『二世部隊』（1951、英語タイトル：Go for Broke!）に、当時の日本人はさほど関心を示さなかったようである。日本人の映画批評家は、二世部隊の活躍を知ればアメリカ人の日本人に対する見方も肯定的なものに変わると認める一方で、映画における二世兵士の「猥雑」で「三枚目扱い」の描写は、アメリカ人の中に「無意識の偏見がひそんでいる」ことを表し、「日本人にいくらかイヤな気持ちをさせることは確か」だと評した²³。日系二世のローレンス坂本による日本語の小説『二世部隊』（1950）や、日系兵士に関する著作の翻訳も戦争直後にいくつか日本で出版されているが、いずれも多くの日本人大衆の関心を引いたとはいえない。

二世部隊が日本の大衆メディアに登場したのは、1960年代初頭の少年

漫画雑誌の戦記物ブームにおいてであった²⁴。1963年に月刊少年漫画雑誌『少年画報』に連載された、望月三起也の『最前線』の主人公は、日系二世部隊である。その後も望月は『GI ジョー悪一番隊』（1970）、『二世部隊物語【約束】』（1970）、『白い罌』（1977）、『新・最前線ワンパカブカ』（1984）など、二世部隊を主人公とした戦争漫画シリーズを描いている。また、SF作家で、数々の外国小説を翻訳した矢野徹は、同じく月刊少年漫画雑誌『少年』で1963年に戦争冒険小説『442 連隊戦闘団 進め！日系二世部隊』を連載した²⁵。1960年代は、第二次大戦を扱ったいわゆる戦争もののアメリカのテレビドラマ『コンバット!』（1962～1967）などが日本でも吹き替えて放送され、人気を博した。そうしたアメリカの戦争ドラマのヒーローはアメリカ白人ばかりだが、アメリカ人として活躍する日系二世兵士を主人公にした望月の漫画や矢野の小説は、敗戦国である日本の人々にとって一種のカタルシスになったのかもしれない。

二世部隊のヒロイズムは、現代でも日本の大衆メディアで高い人気があり、ノンフィクションだけでなく、史実をもとにしたフィクション小説も含め多数の作品がある。在米ノンフィクション作家のドウス昌代は、戦時中に米軍向けプロパガンダとしてラジオ放送にかかわった日系二世女性を取り上げたデビュー作『東京ローズ 反逆者の汚名に泣いた30年』（1977）をはじめ、日系移民史やその戦争体験についてのノンフィクション作品を発表している。二世部隊を取り上げた『ブリエアの解放者たち』は『文藝春秋』で1982年5月から同年12月まで連載され、翌年出版された著書の英訳が、スタンフォード大学で日本近現代史を教える歴史学者の夫ピーター・ドウスによる翻訳で後に出版された²⁶。ほかにも、1970年代からハワイで住職をつとめる荒了寛編著の『ハワイ日系米兵 私たちは何と戦ったのか』（1995）、菊地由紀『ハワイ日系二世の太平洋戦争』（1995）、写真家宍戸清孝の『Jap（ジャップ）と呼ばれて』（2005）などがある。在米のノンフィクション作家渡辺正清は『ヤマト魂：アメリカ・日系二世、自由への戦い』（2001）、『ゴー・フォー・ブ

ローク！日系二世兵士たちの戦場』（2003）を著している。立花譲『帝国海軍士官になった日系二世』（1994）は、日米開戦時日本に滞在していたため日本軍として従軍した日系二世の人生についてである。柳田由紀子は二世兵士の戦争体験を『二世兵士激戦の記録 日系アメリカ人の第二次世界大戦』（2012）にまとめ、現代の日本人が失ってしまった「明治を生んだ武士の時代の心」を日系二世が「まるで「冷凍保存」したかのように」保持していると述べる²⁷。映画監督のすずきじゅんいちちは2001年アメリカに移住し、滞米中に日系アメリカ人の戦争体験に関するドキュメンタリー作品三作『東洋宮武が覗いた時代』（2008）、『442 日系部隊 アメリカ史上最強の陸軍』（2010）、『二つの祖国で 日系陸軍情報部』（2012）を製作した。すずきはこのドキュメンタリーの制作過程を『1941 日系アメリカ人と大和魂』（2012）で語っている。

フィクションでは、真保裕一による『栄光なき凱旋』（2006）が、日系アメリカ人二世を主人公に、日系人の戦争体験をドラマティックに描いた²⁸。また、武知鎮典の小説『442 部隊の真実 アメリカ軍史上、最も勇敢だった日系人部隊の魂の物語』（2012）も同様の舞台設定である。その表紙には、星条旗を背景に、銃を持った日本人の「サムライ」がアメリカの軍服を着た日系人兵士と二重写しで描かれており、日系アメリカ人の潜在的な「ヤマトダマシイ」を提示している。日本の大衆メディアが表象する二世部隊の戦争体験は、いわゆる軍事愛好家の注目を集める一方で、「日本人の血」という民族主義に根差したナショナリズムを強調してきた。

こうした民族主義を、戦争体験ではなく、スポーツというソフトな形で表現したものに、戦前の日系カナダ人の野球チーム、バンクーバー朝日軍を取り上げた大衆メディアがある。1994年に、ドキュメンタリー「知られざるカナダ朝日軍」がTBSの報道特集として放送された。その後、実際に「朝日軍」の選手であった日系カナダ人二世を父にもつテッド・Y・フルモトの小説『バンクーバー朝日軍』が2008年に出版され、これを原作とする漫画が『ビッグコミックスペリオール』で2012年か

ら2014年まで連載された²⁹。2014年には日本の人気俳優を多数起用した映画『バンクーバーの朝日』が公開され、映画をもとにした小説も出版された³⁰。日本人プロ野球選手のメジャーリーグでの活躍や、2006年から始まったワールド・ベースボール・クラシックの宣伝効果とも相まって、日系人のスポーツチームの歴史が現代の日本人スポーツ選手の世界的な活躍と重ね合わされている。

自己／他者としての「日系人」

戦前の日本人移民やその子供世代にあたる日系アメリカ人二世は、「現代の日本人が失ってしまった日本人らしさ」を体現するものとして描かれる一方で、その後続世代である三世以降は日本を「発見」あるいは「再発見」する他者として描かれる傾向がある。二世は移民一世の親から直接に日本文化を引き継いでいるが、孫以降の世代は日本文化をよく知らない、外見的には日本人に見える三世以降の日系人が来日し自分のルーツである日本文化を「発見」し、感激する——というのが主な筋書きであり、日本人視聴者はそれを通して日本文化を「再発見」するのである。2002年から半年間放送されたNHK連続テレビ小説『さくら』の主人公はハワイに住む日系四世の女性である。ハワイ大学在学中に中学校の英語教師として来日して、日本文化を「発見」する。現在千葉県知事の森田健作が企画・出演した映画『I am 日本人』（2006）も同様に、カリフォルニア出身の日系三世女性が、日本留学で「日本人らしさ」を探すことをテーマとしている。尾瀬あきらの漫画『蔵人』（2006～2009年『ビッグコミック』にて連載）は、シアトル出身で青い瞳の日系ハバ（混血）の三世男性クロード・バターメイカーが、戦前に渡米した祖母の父の酒蔵を探して、鳥根で日本酒造りに奮闘する物語である。外国人に日本文化を「（再）発見」させるというモチーフは日本の大衆メディアで近年特に多数みられるが、日本人の「血」を引く日系人だからこそ本質的に日本を理解できるという前提が垣間見える³¹。

日系人は日本文化の「発見」者として表象される一方、どこかミステ

リアスで「日本人離れ」した人物としても描かれている。直木賞作家・江國香織の恋愛小説『金平糖の降るところ』（2011）の主人公、佐和子とミカエラは日系アルゼンチン人二世で、ボーイフレンドを共有するどこか謎めいた姉妹である。工藤かずやと浦沢直樹による漫画『パイナップル ARMY』（1985～1988年『ビッグコミックオリジナル』にて連載）の主人公は日系アメリカ人のジェド・豪士である。ベトナム戦争で名を馳せた主人公が「軍事インストラクター」として、命を狙われた一般市民を助ける、というアメリカを舞台にしたストーリーだが、主人公の生い立ちは謎に包まれている。また、かわぐちかいじの漫画『イーグル』（1998～2001年『ビッグコミック』にて連載）は、日系アメリカ人三世のケネス・ヤマオカがアメリカ大統領選挙に出馬し、最後には選出されるという物語であるが、ヤマオカはどこか本心の読めない、ミステリアスな人物として描かれている。母子家庭で育った沖縄出身の主人公は、実はヤマオカがベトナム戦争従軍中に立ち寄った沖縄で出会った沖縄人女性との間に生まれた子供、いわば隠し子であり、日本からの新聞記者として父親の選挙戦を取材する。この漫画は2000年当時のアメリカ大統領選挙をモデルとしており、実在の人物を模した登場人物が多い。例えば、アル・ゴアをモデルとした、ヤマオカの民主党予備選挙のライバル、アルバート・ノアは、予備選で敗れるも副大統領候補者としてヤマオカの指名を受ける。現実では日系どころかアジア系アメリカ人候補者の予備選出馬すらない中で、日系アメリカ人大統領の誕生は非現実的だが、そこには「日本人がアメリカで成しえないことをやり遂げる日系人」像が投影されている。

おわりに

最後に、研究者がこうした「日系人」大衆メディアと向き合った最近の事例の一つとして、2010年に放送されたテレビドラマ『99年の愛～Japanese Americans～』を挙げる。このドラマはTBSテレビ開局60周年特別企画として、5夜連続で放送された。脚本をてがけた橋田壽賀子

が「戦争と平和への全ての思いを託した私の集大成」と語ったこのドラマは、1912年にシアトルへ渡った日本人移民家族の一世に渡る物語である³²。トヨタとパナソニックが主なスポンサーとなり、アメリカでのロケーション撮影を含めて多額の製作費を投じ、人気アイドルや有名俳優が多数出演した。最終回の視聴率は19.1%で、製作費に比して低視聴率だったという評価もあるが、2011年東京国際ドラマアワードで受賞し、2011年に再放送もされた。このドラマは書籍化され、ジュニア版も出版された³³。

このドラマにおいては、かつて山崎豊子の『二つの祖国』とそのドラマ『山河燃ゆ』を厳しく批判した飯野正子を含め、島田法子、糸井輝子の三人の日系移民史研究者が専門家として時代考証を行った。三人は2013年にシアトルで開催された全米日系人博物館主催の会議の日本語セッションで、このドラマ製作への関与について発表した³⁴。飯野はこのドラマ制作の経緯を説明し、島田は時代考証を行う中で、史実と合致しないことを指摘したが変更されなかった点、指摘を受けて修正あるいは削除された点を述べた。糸井はドラマを視聴した日本人の大学生の反応について発表した。TBSが開設したこのドラマのウェブサイトには、制作者や出演者へのインタビューに加えて、日系アメリカ人の歴史の伝承を目的とする、シアトルにある非営利団体Denshoの日本語ポータルサイト、「[日系アメリカ人] オンライン歴史資料館」へのリンクが代表理事のメッセージとともに掲載されている³⁵。このドラマに描かれた日系アメリカ人の表象が適切かどうかはともかく、これらの事実は、日本の「日系人」大衆メディアと研究者、また、アメリカの日系コミュニティとの関係が、80年代の「日系人ブーム」の頃と比較して、大きく変化したことを示すものである。日本の大衆メディアにおける日系人の表象が正しいかどうか、適切かどうかを論じるだけでなく、そういった表象が日本社会にとっての自己あるいは他者に対する理解をどのようにあらわすものなのかを考えることも、研究対象に「真摯に向き合う」ことなのではないだろうか。

本稿は、成城大学特別研究助成「自己／他者としての「日系人」表象—日本における文学・映像作品の分析から」（平成 26 年度）の研究成果である。

注

- 1 山中速人『ハワイ』岩波新書、1997 年、142 頁。
- 2 Izumi Masumi, “Teaching Asian American Studies in Japan: Challenges and Possibilities,” in *Trans-Pacific Japanese American Studies: Conversations on Race and Racialization*, eds. by Yasuko Takezawa and Gary Okihiro (Honolulu: University of Hawaii Press, 2016): 327-28.
- 3 Okiyoshi Takeda, “Japanese Americans in Academia and Political Discourse in Japan,” in *Trans-Pacific Japanese American Studies*, 385-88.
- 4 森茂岳雄・中山京子編著『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ—』明石書店、2008 年。
- 5 Yujin Yaguchi, “Japanese Reinvention of Self through Hawai’i’s Japanese Americans,” *Pacific Historical Review* 83, no. 2 (2014): 333-49.
- 6 テッサ・モーリス＝スズキ『過去は死なない メディア・歴史・記憶』岩波書店、2014[2004] 年、20 頁。
- 7 「文学・ノンフィクション」移民研究会編『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅰ 明治初期—1992 年 9 月』明石書店、2007 年、148-63 頁。
- 8 例えば、『日本の移民研究』の日本語で出版された「日系文学・ノンフィクション」作品一覧は、「日本人作家の移民に関する小説も除外し、純粋に日系人によって書かれた作品のみを掲載」している。また、19 世紀末に渡米し、アメリカやイギリスで英語の作品を発表した詩人の野口米次郎の作品はリストに含めず、「野口を移民と考えるか否かは議論のあるところ」としている（156-57 頁）。また、日比嘉高は、20 世紀初頭に 5 年間アメリカに滞在し、帰国後に出版された永井荷風の『あめりか物語』は「日本文学」なのか、「日系文学」なのかという問いを立てている。日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』新曜社、2014 年。
- 9 例えば、村上由見子『イエローフェイス：ハリウッド映画に見るアジア人の肖像』朝日新聞社、1993 年など。
- 10 文芸評論家の川村湊は、「移民文学」というのは出移民として母国を離れた者による文学作品であると定義しながらも、日本では「移民文学」というと、第 1 回芥川賞受賞作品である石川達三の『蒼氓』（1935）のような移民「についての」文学作品が想像されがちであると指摘している。そういった意味でいえば、本稿が対象としているのは、まさに「移民文学として想像されがちなもの」である。

- 川村湊「移民と棄民—移民文学論序説」『国文学 解釈と教材の研究』44 卷 12 号 (1994 年)、44-50 頁。
- 11 宮崎正弘編『二つの山河 日系アメリカ人、かく闘えり』ダイナミックセラーズ、1984 年、22 頁、藤島泰輔『忠誠登録』読売新聞社、1967 年。
 - 12 藤島『忠誠登録』、290 頁。
 - 13 井上靖『わだつみ第 1 部～第 3 部』、岩波書店、1977 年。
 - 14 権田萬治「解説」、山崎豊子『山崎豊子全集 18 二つの祖国 (三)』新潮社、2005 年、534 頁 (初出 1986 年)。
 - 15 社会学者の大澤真幸は、社会現象としての「山崎豊子」を考察し、山崎は「戦後日本で最も広く読まれた作家の一人」で、「中年以上の日本人で、山崎作品を一つも知らない日本人は皆無だと断言しても、あながち誇張とは言えない」と述べる。また、山崎の作品はめったに文学的研究の対象にならなかったことを指摘し、同世代の作家として三島由紀夫との興味深い比較をしている。大澤真幸「山崎豊子の〈男〉 第一回 男を書いた女」『波』第 50 卷 3 号 (2016 年 3 月)、73-81 頁。なお、大澤はこの雑誌連載の中で『二つの祖国』を取り上げている。大澤「山崎豊子の〈男〉 第九回 祖国なき敗者」『波』第 50 卷 11 号 (2016 年 11 月)、74-81 頁。
 - 16 「視聴率データ、過去の視聴率データ、NHK 大河ドラマ」ビデオリサーチ、<http://www.videor.co.jp/data/ratedata/program/03taiga.htm> (2017 年 1 月 31 日閲覧)
 - 17 飯野正子・篠田左多江「日系関係を映す鏡—移民史からの接近—」128-41 頁、河村望「『二つの祖国』に見る『日本人論』」142-54 頁、ともに『文化評論』278 卷 (1984 年 5 月)。
 - 18 本間長世「アメリカ社会における日系人—問題意識の歴史風—to」40-51 頁、篠田左多江「北米の日系アメリカ文学」71-75 頁、ともに『正論』1983 年 12 月号。
 - 19 アンドルー・Y・クログ「『二つの祖国』という概念はあり得ない 日系米人の心を歪曲するテレビドラマ『山河燃ゆ』」『朝日ジャーナル』26 (3)、1984 年 3 月、26-29 頁。
 - 20 「特別企画 日系米人『私たちはかく生きてきた』」『文藝春秋』1984 年 6 月号、188-223 頁。
 - 21 山中『ハワイ』、141-42 頁。
 - 22 井上ひさし『マンザナ、わが町』集英社、1993 年。
 - 23 上野一郎「二世部隊 Go for Broke!」『キネマ旬報』No. 31 (1952 年 2 月上旬号)、91-92 頁。
 - 24 夏日房之介『マンガと「戦争」』講談社、1997 年。
 - 25 矢野は『少年』での『442 連隊戦闘団』執筆後、1978 年に訪米して 442 連隊についてインタビューなどの調査を行った。これについては、小説と同じタイトルで 1979 年に角川文庫から出版されている。
 - 26 ドウス昌代『プリエアの解放者たち』文芸春秋、1983 年。英訳は *Unlikely Liberators: The Men of the 100th and 442nd*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1987.
 - 27 柳田由紀子『二世兵士激戦の記録 日系アメリカ人の第二次世界大戦』新潮新書、2012 年、18 頁。
 - 28 真保裕一『栄光なき凱旋 (上下)』小学館、2006 年。『週刊ポスト』にて 2003 年

- 5月から2005年12月まで連載。
- 29 後藤紀夫『バンクーバー朝日物語』岩波書店、2010年。テッド・Y・フルモト『バンクーバー朝日軍』は初めに2008年に文芸社から出版され、2009年に東峰書房より『バンクーバー朝日軍：伝説の「サムライ野球チーム」その歴史と栄光』として再版された。同書は2014年に文芸社から文庫化された。
 - 30 西山繭子『バンクーバーの朝日』マガジンハウス、2014年。
 - 31 米倉律「テレビ番組における訪日外国人、国内在住外国人の表象：地上波民放の『外国、外国人関連バラエティ番組』を中心に」『ジャーナリズム&メディア：新聞学研究所紀要』8（2015）、189-205頁。
 - 32 橋田壽賀子「コメント」『99年の愛～Japanese Americans～』<http://www.tbs.co.jp/japanese-americans/comment/>（2017年2月8日閲覧）。
 - 33 橋田壽賀子『99年の愛～Japanese Americans～』小学館、2010年、橋田壽賀子脚本『ジュニア版 99年の愛～Japanese Americans～』汐文社、2010年。
 - 34 飯野正子、糸井輝子、島田法子「99年の愛／憎しみ（99 Years of Love/Hate）」, “Speaking up! Democracy, Justice, Dignity,” A national conference commemorating the 25th anniversary of the signing of the Civil Liberties Act of 1988, July 4-7, 2013. 全米日系人博物館が運営するウェブサイト「ディスカバー・ニッケイ」に、発表原稿および音声記録が掲載されている。飯野正子「ドラマ『99年の愛』一作成の背景」2013年8月23日、<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2013/8/23/99nen-ai-haikei/>, 糸井輝子「ドラマ『99年の愛』—学生の反応」、2013年8月29日、<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2013/8/29/99nen-ai-hannou/>, 島田法子「ドラマ『99年の愛』—時代考証を振り返って」、2013年8月27日、<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2013/8/27/99nen-ai-jidai-kosho/>（2017年2月8日閲覧）。
 - 35 「日系アメリカ人」オンライン歴史資料館、<http://www.tbs.co.jp/japanese-americans/history/>（2017年2月8日閲覧）

